

小学校英語教育へのフォニックス導入に関する一考察

A Study on Introducing Phonics to English Language Education in Primary School

尾上 利美

Toshimi ONOE

(和歌山大学教育学部英語教室)

2016年10月7日受理

要旨

The purpose of this paper is to consider how we can instruct pupils the relation between English sounds and letters. The difficulties in relating English sounds and letters for English learners of Japanese, the effectiveness of teaching phonics, and the situation of phonics instruction in junior high schools are reviewed. The author concludes that teaching phonics, especially synthetic phonics in primary education is important when attempting to develop literacy skills.

1. はじめに

平成20(2008)年3月の小学校学習指導要領の改訂で、「外国語活動」が小学校5・6年生で必修化された。平成23(2011)年4月の全面実施からわずか3年後、英語教育有識者会議による「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」(文部科学省, 2014)では、領域扱いである「外国語活動」を小学校3・4年生へ下ろし、小学校5・6年生は教科として「英語」を新設することが示された。提言によると、小学校では「中学年から外国語活動を開始し、音声に慣れ親しませながらコミュニケーション能力の素地を養うとともに、ことばへの関心を高める。高学年では身近なことについて基本的な表現によって『聞く』『話す』ことなどに加え、『読む』『書く』の態度の育成を含めたコミュニケーション能力の基礎を養う。学習の系統性を持たせるため教科として行うことが求められる。」とされ、音声中心に英語に慣れ親しんできた5・6年生のこれまでの学び方から、「読む」「書く」という文字を媒体とする技能の習得も目指すというこれまでとは大きく異なる方向性が示された。この提言をうけ、文部科学省(2015)は、「外国語活動」が必修化されて以来、国内の多くの小学校で使用されている英語教材『Hi, friends! 1』(2012)および『Hi, friends! 2』(2012)の補助教材『Hi, friends! Plus』を新たに作成し、平成27(2015)年4月から、国内の一部の小学校と都道府県・市区町村の教育委員会への配布およびワークシート等をホームページ上で公開し、小学校高学年での英語教科化へ向けて様々な検証を行っている。この補助教材『Hi, friends! Plus』は、「次期学習指導要領の改訂に向け、身近なこ

とについて基本的な表現によって「聞く」「話す」ことなどに加え、『読む』『書く』の態度の育成を含めたコミュニケーション能力の基礎を養うことができるよう、映像や音声を活用し、1. アルファベット文字の認識、2. 日本語と英語の音声の違いやそれぞれの特徴への気付き、3. 語順の違いなど文構造への気付き等に関する指導に必要な新たな教材」である(文部科学省, 2015)。小学校5・6年生での英語の教科化は、教育課程上大きな変化であるが、学習内容に「読む」「書く」が入ることは、さらに大きな課題になると考える。なぜなら、英語の音声と文字を結びつけることは困難であり、それが中学生の英語学習におけるつまずきの一つであると指摘されているからである。

ベネッセ教育研究所(2016, p.9)が行った「中高の英語指導に関する実態調査2015」では、中学校の英語教員が生徒のつまずきの原因として指摘した上位5項目は、「単語(発音・綴り・意味)を覚えるのが苦手」(60.9%)、「英語に限らず、学習習慣がついていない」(60.2%)、「文や文字を書くことが苦手」(57.2%)、「英語に限らず、学習自体への意欲が低い」(52.2%)、「文字や文章を読めない(文字から音にうまく変換できない)」(43.1%)である。上位5項目のうち、学習そのものに対する習慣や意欲の項目である2つをのぞくと、残りの3つは全て英語の文字と音のつながりが理解できないことから生じる原因であるといえる。筆者は、時折、中学校英語科の授業を参観するが、書かれた単語の綴りが読めずに困っている生徒をしばしば目にする。授業者も、単語が読めない生徒を支援するために、何度も音読をして生徒に聞かせたりするが、発音された音を聞き取ることができずにあきらめてしまう生徒も中

にはいる。聞き取った音を、なんとか保持しようと英単語の上にカタカナで読み方を書く生徒もいるが、なかなかスムーズに書くことができない。中学1年9月の授業時に、生徒がプリントに“weather”と書かれたものを、「これ、ウォーター(water)、水と書いてると思う。」と予測したり、“dangerous”を自分の力で読むことはできなかったが、この単語を音声で聞くと、「あ、危険っていう意味の単語だ。」と理解できた光景も筆者は目の当たりにしている。音声で聴くと単語の意味は理解できるが、文字で書かれた状態で提示された場合は読むことができない。このような光景は、これまで小学校の「外国語活動」の授業で音声中心に英語に慣れ親しみ、聞いて理解できる語彙や表現が子ども達に身についてきているということを示すものであるといえる。小学校の子ども達にふさわしい音声と文字の関係を学ぶ方法の開発は喫緊の課題であり、先に挙げた「中高の英語指導に関する実態調査2015」が示すように、中学生が文字と音のつながりが理解できない為に英語学習につまずいている状態へとつながるような、従来、中学校で行ってきたものとは異なる方法をとる必要がある。英語を母語とする子ども達にとっても英語の音声と文字の結びつきを習得することは難しく、英語の音声と文字をつなぐ手立てとして学ぶのがフォニックス(phonics)である。これは、「音素(phoneme)とアルファベット(alphabet)との結びつきを教えることで、読む能力を高めようとする方法」であり、「フォニックスは、もともとは母語としての英語学習での読みの訓練をするための方法であったが、現在では外国語教育においても広く利用されている」(白畑・富田・村野井・若林, 2009, p.230)。

本稿では、アルファベット文字をそのまま音と結びつけて指導するフォニックスを小学校英語教育に導入すること、および指導のあり方について検討することを目的とする。まず、英語学習において文字と発音を結びつけることの難しさ、フォニックスの教育的効果を概観する。さらに、中学校英語科および英語を母語として学ぶ子ども達に対するフォニックスの取り扱いの現状について述べ、小学校英語教育におけるフォニックスの導入と指導のあり方について提案する。

2. 英語学習におけるつまずき—文字と発音を結びつけることの難しさ

英語学習において、発音と文字を結びつけることが困難だと感じる生徒は多く、このことが生徒の英語学習のつまずきの一つであると指摘する研究は多い。例えば、三木(2016, p.195)は、2014年にベネッセが行った「中高生の英語学習に関する実態調査2014」(ベネッセ教育総合研究所, 2014)の結果で示された英語が苦手と感じるようになった時期が、中1の前半から中2の後半までであったことに着目し、「筆者はその中でも

早い時期、つまり中学1年生の1学期の期末テストの頃には、もうすでに授業についていけないことを本人も自覚しているのではないかと思っている。」と述べる。その理由として、「その頃にはすでに、教科書の本文や黒板に書いてあることさえも音読できないからである。授業で先生の復唱はできても家に帰ると単語が読めない。(音声化できない)ノートに写している単語や英文も何と読むかわからず視覚記憶に頼って写しているので写すのに時間がかかるし、誤りも多い。書くことに多大なエネルギーが必要であるが、全く記憶に残らないという状況に陥っているのである。」という。

このような困難な状況にいる生徒の割合は、三木(2016)によれば、「英語学習のスタート地点でつまずき、授業参加が難しくなっている生徒は、読み書きに困難を持つLDの生徒を中心に全体の10~20%程度は存在していると思われる。」という。また、銘荊ら(2016)は、中学1年生から3年生1326名を対象に、英単語の綴りがどれくらい困難であるかを調査した結果、「全学年における約10パーセントの強い綴り困難者の存在とともに、1~3年生にかけての綴り低成績者の増加傾向を指摘した。」(p.283)と報告する。日本語での読み書きに困難を持つLDの生徒だけでなく、英語の読み書きになると困難を示す生徒が全生徒の1割~2割いるという結果は、見過ごせない事実である。

銘荊ら(2016)は、中学1~3年生で英単語綴りの低成績者が増加することに関与する4つの要因を挙げている。それらは、「全学年共通して、ローマ字書字の低成績がリスク要因として関与すること」、「ローマ字書字、英単語検索、フォニックスの知識の順に基礎スキルが多様になること」、「基礎スキルの成績差が学年を追うごとに拡大していること」、「リスク要因となる基礎スキルの低成績が重複した場合、英単語の綴り困難になるリスクが著しく高まること」(p.283)である。さらに、「これにより、基礎スキルの習得は、ローマ字スキル(小学校段階)、英単語検索スキル(中学1~2年生段階)、フォニックスの知識(2~3年生段階)の順で進行し、これらに依存した学習法略に依存することが推測できる。本研究の結果、1~3年生にかけての綴り低成績者の増加傾向を認めたと、その背景には、これらの学習法略の移行が関与すると考えられる。」(p.281)と述べる。英単語を綴ることが学年を追うごとに困難になっていく要因は1つではなく、複数の要因が関与するという銘荊らの指摘は、英語の発音と文字を結びつける指導法を構築する場合は、単に「英語」という教科内に指導にとどまらず、教科を越えて、また、校種を越えての指導の大切さを示唆する。

3. フォニックス学習の効果

フォニックスの規則を学び活用することで、学習者

は自分で英単語を読むことができるようになるといわれている。松香(2008)は、平成18年度版の中学校英語教科書6種18冊に掲載されている語が、MPIのフォニックス・ルールを当てはめることでどのぐらい読むことができるかを調査している¹。調査の結果、「MPIのフォニックス・ルールを学べば、中学校の英語教科書のおよそ7割を初見で正確に読むことができ、読むことができるということは、正しく書けるということです。」(p.19)という。渋谷(2011)の調査は、英語圏および国内で使用されている代表的なフォニックス教材から共通する10の代表的規則を特定し、それらを用いて中学校英語教科書で頻出する名詞をどれぐらい発音できるかを検証したものである²。「中学校英語教科書6種類の語彙調査」で頻度3以上に分類される名詞466語の約80%をフォニックスの規則を用いて読むことができると報告している³。これらの調査結果は、フォニックス規則を学び活用することで7割から8割の単語を読めることを示しており、フォニックスが文字と発音を結びつけることの一助であることが認められる。

英語を読むことに一般的に効果があるといわれるフォニックスは、特別な支援を必要とする学習者にとっても効果がある。奥村(2014)は、全体的な知的発達に正常域にあるものの、日本語の読み書きが困難であり、また、1文字の英語アルファベットの読み書きにも困難を伴い英単語の学習が遅滞する2名の中学生にフォニックスとライムを活用した指導を行った⁴。指導の結果、「英語の文字/綴りと音を明示的に対応付け、それに基づいて単語を読み書きする方法は有効であった。」(p.128)と報告する。また、読み書きに困難を伴う前述の生徒のほか、軽度認知障害をもつ生徒、および単語の意味を理解したり読んだりすることは出来るが英単語の綴りを記憶することに困難を訴える生徒に対しても、フォニックスの指導が有効であったことを報告している。神谷(2015)が支援を行った生徒は、中学生の時から英単語を読むことが困難であり、英語学習を苦手としていた。しかし、高校2年時に英単語の読み書き能力に関するアセスメントを受け、フォニックスの指導を始めとする支援策を受けることで、「高校卒業時には、中学2年相当の英単語と英文法を習得するに至った。」(p.112)ことが示されている。

4. 中学校英語科教育におけるフォニックス

現在の『中学校学習指導要領』(文部科学省, 2008)においても、音声と文字の繋がりへの指導は、明記されている。「2 内容 4) 言語材料の取扱い」では、「ア発音と綴(つづ)りとを関連付けて指導すること。」とある。また、発音については、「3 指導計画の作成と内容の取扱い」の中で、「ウ 音声指導に当たっては、日本語との違いに留意しながら、発音練習などを通して2の(3)のアに示された言語材料を継続して指導する

こと。また、音声指導の補助として、必要に応じて発音表記を用いて指導することもできること。」とされている。英語の発音と綴りを関連づけて指導する方法の一つとして、様々な教育段階においてフォニックスが活用されたり、発音記号を用いたりへの指導が提案されている(e.g., 相澤・望月, 2010)。しかし、フォニックス指導は現在のところ、限定的であると言わざるをえない。麻植・小枝(2014, p.77)が行った通常学級に在籍する中学1年生を指導する英語教員19名にフォニックスの指導の有無についてたずねたところ、全体の74%にあたる14名が指導を行い、その指導の時期は4月から6月頃にかけてであった。授業実践の報告もあるが(e.g. Takeda, 2006)、その数は少なく、広く普及しているとはいいがたい状況である。

中学校英語教科書においても、フォニックスを紹介するページはあるが、体系的に指導を行えるようなものではない。例えば、『NEW HORIZON English Course 1』(笠島・関ほか, 2016)では、「Unit 0 アルファベット」で「The Phonics Chant」を用いてAからZの順に英単語を読むように促す箇所がある。発音と綴りの繋がりについては、巻末の資料編に「英語の音とつづり」(pp.148-149)として、「1 基本的な発音を覚えよう」でAからZまでの文字と発音記号、発音の仕方を一覧で示し、「2 異なる発音のしかたを覚えよう」で母音字a, e, i, o, uと子音字c, gが基本的な発音とは違った発音になることを紹介し、「3 基本的なルールを覚えよう」では、いわゆるマジックeと呼ばれる規則を取り上げている⁵。発音記号についての説明は、巻末のWord Listを理解するために「学び方コーナー⑥」(p.115)で行われている。一方、2年生、3年生で使用する『NEW HORIZON English Course 2』『NEW HORIZON English Course 3』では、フォニックスおよび発音と綴りの繋がりについてのページはない。

中学校英語科においてフォニックスは知られてきたものの、教師が日々の授業にフォニックスを積極的に導入することを阻む原因がいくつか指摘されている(君塚・西尾・田中, 2010, p.146)。まず、教師自身がフォニックスを学んだ経験がないため、授業で実践を行う前提として、教師自身がフォニックスについて理解しその効果を体感しなければならず、簡単には導入できないから、また、年間指導計画にどのようにフォニックスを位置づけるべきかが分からないから、という理由である。教える側の教師にフォニックスを学習した経験がなければ、それを生徒に教えるのは困難である。実際に、吉田・鄭(2012, pp.16-17)の研究が、日本の英語教育ではフォニックスの学習経験を十分に提供できていないことを示している。英語教師を目指す大学生に34名に対する調査で、「“フォニックス”を聞いたことがありますか。」という質問に「はい」と

答えた学生は61%、「フォニックス」を習ったことがありますか。」という質問に「はい」と答えた学生は47%であった。「フォニックス」という言葉は聞いたことがあっても、実際に学習した経験は少ないことがわかる。

5. 母語教育におけるフォニックス

フォニックスは、英語圏の子ども達が英語で読むことができるようになるために用いられる指導法の一つであるが、フォニックスの指導法も、その活用の仕方によって様々に分類される(田中・林, 2014)。英国で主として行われてきた指導法であるAnalytic Phonics(アナリティック・フォニックス)とSynthetic Phonics(シンセティック・フォニックス)については、これらの読みに対する効果の検証が行われている。Synthetic Phonicsで指導した子ども達の方が、英語を読む能力を高まることが明らかにされており、英国では英語教育の導入時にSynthetic Phonicsを用いた指導が進められている(湯澤・山下, 2015)。

湯澤・山下(2015, p.98)によると、Analytic Phonicsは、「単語を最初の文字とそれに続く母音に分割していく方法である。」と述べ、「たとえば、man、milk、motherと既知の単語について、共通した音声類似するmの音であることに着目させ、文字を教えていく教授法である。語頭の学習から、次に、単語の最後に来る文字と音の関係、そして真ん中の文字と音の関係を指導していき、ようやく子音-母音-子音の単語を自分で読み書きできるようにしていく。」と、指導手順を説明する。この指導法では、フォニックスを学ぶ前提として単語を知っていることが必須となり、「まずは生徒たちに単語を暗記させてからPhonicsを指導するという“Word Recognition(単語認識)”が第一ステップとなっている。」という。一方、「Synthetic Phonicsとは、生徒の単語習得に関係なく、phonicsを教える際、文字と音声が一対一対応であることを教え、s、a、t、i、p、nという文字の頻出順に指導し、一つの文字を指導したら、すぐに既習の文字を組み合わせる(Synthesize)読み書きができるようにする教授法である。」と述べる。さらに、大きな特徴として、Synthetic Phonicsでは、「生徒たちは単語を既習している必要がないこと、文字の最小単位である音素から文字を習得し、速いテンポで文字と音声の関係を学んでいくこと、そして、Analytic Phonicsでは、2年目にai、oa、ch、thというように二つの文字で一つの音を作るダイグラフを学ぶが、Synthetic Phonicsでは半年以内でこうしたダイグラフも読み書きができるようになること」を挙げている。

6. 小学校英語教育におけるフォニックスのあり方

小学校で文字を指導する場合、文字と音をつなぐフォニックスの指導をすることが必要であるように思わ

れる。野呂(2004)は、小学校における文字指導と指導試案を提案し、指導の要点として、「①英語のフォニックス・アルファベットに対応する音声を知ることであり、②単語が読めるように、それらの音を組み合わせる(blend)読める力をつけることである。」(p.156)を挙げる。ここで、野呂が例示したフォニックス・アルファベットは、Jolly Phonicsで示されるフォニックス・アルファベット、およびその指導順序であり、Jolly Phonicsは、湯澤・山下(2015, pp.99-100)が指摘するように、Analytic Phonicsに比べて教育効果が高いSynthetic Phonicsを、英国で広める大きな役割を担ってきたものである。「Jolly Phonicsの特徴は、子どもが音声に関連するイラスト(視覚)、物語(想像)、音(聴覚)、アクション(動作)、歌、触覚による文字の認識を多感的に連動させて、英語の音声と文字を、子どもが楽しみながら学ぶことができる点が特徴」(湯澤・山下, p.100)である。

文字の指導、および音声と文字をつなぐ指導は、小学校で完結する指導ではない。小学校において音声と文字をつなぐために良い学習のスタートを切ることができれば、中学校でより複雑な英文や語彙に出会ったときにも、小学校での音声と文字をつなぐ指導を基に学習を継続することができる。また、高等学校や大学において、さらに難解な英文や語彙を読んだり書いたりしなければならなくなった時も、書かれている単語が読めない困難は軽減されると思われる。野呂(2004)は、「文字指導試案で提案したように、小学校では、まず十分音声言語に触れさせ、英語の音韻認識力を高めることが必要である。英語に触れる際に文字も同時に提示し、徐々に文字に関心を持たせることができる。文字に興味が出てきたところで、フォニックスを取り入れて、文字と音声の対応規則を身につけさせれば、中学校で英語が読めない学習者の数はかなり減少すると思われる。」(p.156)と述べ、「小学校の英語活動で中学校で学習する教育内容を先取りして教えないようにという注意がなされるが、フォニックスを取り入れた文字指導は小学校と中学校がうまく連携できる領域の一つである。」(pp.156-157)ことを指摘する。また、湯澤・山下(2015)は、「依然、日本における外国語活動では、『文字不要論』の議論が高い。しかし、英語を学び始める子どもたちにとって、どういった学習の道筋が、『分かる』授業に繋がり、その後の英語学習への関心を方向づけることができるのかといった点に真摯に向きあう必要がある。Synthetic Phonicsを通して、英語の音声に関する音韻意識を高める活動を十分に行い、日本語にない子音の発音を促し、楽しみながら学ぶ体験を通して、英語の語彙を積み上げていくといった英語学習の確かなスタートこそ、今後の日本における英語学習の導入期の在り方として検討されるべきであると筆者らは考える。」(p.105)と主張する。

英国で効果を挙げているSynthetic Phonicsを基に、日本の子ども達に相応しいフォニックス指導の方法を開発していくことがまず不可欠である。また、小学校3・4年生への「外国語活動」の導入、小学校5・6年生での英語の教科化と学習内容に「読む」「書く」が入ることを契機として、日本の英語教育全体の文字を媒体する技能の教育について見直すこと、さらに、ローマ字指導と英語のアルファベット指導をいかに有機的につなぐべきかについても検討が必要であると考え。

7. おわりに

本稿では、アルファベット文字をそのまま音と結びつけて指導するフォニックスを小学校英語教育に導入することについて、英語学習において文字と発音を結びつけることの難しさ、および、フォニックスの教育的効果、中学校英語科および英語を母語として学ぶ子ども達に対するフォニックスの取り扱いという点から検討してきた。Synthetic Phonicsを基にした日本の子ども達に相応しいフォニックス指導の方法の開発の必要性を述べたが、日本語を母語とする子どもたちに英語の音声と文字をつなぐフォニックスの具体的な指導に関しては提案することができなかった。今後の課題としたい。

引用文献

- 相澤一美・望月正道(編著)(2010)『英語彙彙指導の実践アイデア集—活動例からテスト作成まで』東京：大修館書店
- 麻植由紀子・小枝達也(2014)「発達障害がある生徒に対する英語学習支援に関する研究」『地域学論集：鳥取大学地域学部紀要』第10巻 第3号 75-84頁
- ベネッセ教育総合研究所(2014)『中高生の英語学習に関する実態調査2014 速報版』http://berd.benesse.jp/up_images/research/Teenagers_English_learning_Survey-2014_ALL.pdf
- ベネッセ教育総合研究所(2016)『中高の英語指導に関する実態調査2015 グイジェスト版』http://berd.benesse.jp/up_images/research/Eigo_Shido_all.pdf
- 笠島準一・関典明 ほか39名(2016)『NEW HORIZON English Course 1』東京：東京書籍株式会社
- 笠島準一・関典明 ほか39名(2016)『NEW HORIZON English Course 2』東京：東京書籍株式会社
- 笠島準一・関典明 ほか39名(2016)『NEW HORIZON English Course 3』東京：東京書籍株式会社
- 神谷純子(2015)「英単語の読み書き能力に関するアセスメント(試案)と支援—「ひらがな・漢字の書字発達段階評価表」を応用して—」『帝京科学大学紀要』11、109-113頁
- 君塚淳一・西尾直美・田中智子(2010)「小学校英語における課題を考える—フォニックスの効用と課題(1)—」『茨城大学教育実践研究』29、137-147頁
- 松香洋子(2008)『フォニックスってなんですか?』東京：mpi
- 銘苺英土・中知華穂・後藤隆章・小池敏英(2016)「中学1-3年生の英単語綴り困難における重複リスク要因に関する研究—重複リスク要因の学年的特徴に基づく検討—」『LD研究』25(2)、272-285頁
- 三木さゆり(2016)「小・中学校における初期の英語指導で大切なこと」(pp.195-198)(困難さと支援例について(第24回大会特集 学びの接続と共生社会—アセスメントと学習支援を基盤として—学会企画シンポジウム 英語学習における特異な困難と指導法)『LD研究』25(2)、194-208頁
- 文部科学省(2008)『小学校学習指導要領』http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/
- 文部科学省(2008)『中学校学習指導要領』http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/
- 文部科学省(2012)『Hi, friends! 1』東京書籍株式会社：東京
- 文部科学省(2012)『Hi, friends! 2』東京書籍株式会社：東京
- 文部科学省(2014)『今後の英語教育の改善・充実方策について報告—グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言—』http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352463.htm
- 文部科学省(2015)『小学校の新たな外国語教育における補助教材(Hi, friends! Plus)の作成について(第5・6学年用)』http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1355637.htm
- 野呂忠司(2004)「小学校の『英語活動』における文字指導の意義と必要性—小学校と中学校における文字指導の連携をめざして—」『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』第7号、151-157頁
- 奥村安寿子(2014)「英単語習得の困難な生徒の支援」『子ども発達臨床研究』第6号、125-129頁
- 渋谷玉輝(2011)「早期英語教育におけるフォニックス導入の可能性」『言語と文明：論集』第9巻、113-123頁
- 白畑知彦・富田祐一・村野井仁・若林茂則(2009)『改訂版 英語教育用語辞典』東京：大修館書店
- Takeda, C. (2006) The Application of Phonics to the Teaching of reading and Writing in Junior High School English Classes in Japan, JACET-CSCRB, 3, 99-111
- 田中彰一・林裕子(2014)「小学校外国語活動と中学校英語科の接続(2)—英語教育改革実施計画(2013)を受けて—」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』19(1)、21-39頁
- 吉田晴世・鄭京淑(2012)「教員養成課程におけるフォニックス指導の必要性」『大阪教育大学教科教育学論集』11、15-23頁
- 湯澤美紀・山下桂世子(2015)「英国におけるSynthetic Phonicsの取組—英語学習導入期における教育実践の現状」『ノートルダム清心女子大学紀要. 人間生活学・児童学・食品栄養学編』39(1)、94-106頁

注

- 『アメリカの子どもが「英語を覚える」101の法則』(松香洋子(著)2000年、講談社)で取り上げられているフォニックス・ルールのことである。
- 代表的なフォニックス教材4冊が選ばれている。それらは、『Mr. Bug's Phonics Book I, II』(1999, Oxford University Press)、『Phonics Fun』(2002, Pearson Education Asia)、『The Phonics Handbook』(1992, Jolly Learning Ltd.)、『Let's Study Phonics』(2007, 松香フォニックス研究所)である。
- 頻度3以上に分類される名詞を選んだ理由は、「小学校で指導される単語のほとんどが名詞であるから」と、「6種類の教科書の半数で使用されており、中学校段階として学習に値する単語と考えられるから」と述べられている(渋谷, 2011, p.119)。「頻度3」とは6種類の教科書のうち3種類の教科書で使用されているということである。
- 奥村(2014, p.127)は、「ライムは単語の母音と語尾子音を

合わせた言語単位であり、例えばspeakのeakが相当する。」と述べ、さらに、「またライムは、母音の発音の手がかりになることが多いため、これを用いた指導を行うことで英単語の読み書き学習をさらに発展できると思われた。」と主張する。

- 5 「母音字+子音字1つ+e」で終わる語の中の母音字は名前読みをするという規則。例えば、tapは/tæp/であるが、tapeは/teip/であり、語中のaは、/æ/ではなく/eɪ/と発音される。